

乱

RAN 5
麦社通信

「自己権力」論をめぐる断想——立原 信弘
反ファシズム闘争とW・ライヒ——江川 允通
労働者評議会の思想——パンネクック



アナキスト群像

九八〇円

I・L・ホロヴィツ編 大沢正道・江川允通・今村五月共訳

主要目次 序論—ホロヴィツ

第一部理論篇 アナキズムの社会的経済的基礎—バクーニン／国家社会主義とリバタリアニズム—タッカー／イデオロギーとしてのアナキズム—ロツカー／文明と個人の自由—ウォーレン／アナキズムと現代の社会—リード

第二部運動篇 スペインのアナキズム—ブレナン／土地と自由—ロシアの農民アナキズム—マサック／アナキズム対イタリア国家—ホステッター／クロンシュタット—ロシヤアナキズムの終幕—ベルクマン／われわれは最後の瞬間まで闘うだろう—サツコ、ヴァンゼツチ／スペイン内戦下のアナキスト労働連合—トーマス
附 参考文献

不可視のコミュニオン 野本三吉著 七五〇円

社会評論社

東京都文京区本郷2-25-14
TEL (814)8515

反国家と

自由の思想

いま、ぼくは住みなれた「アナキズム」の地平から、
ぼく自身の必然の世界へと飛翔する滑走路に入っている——（へしきがき）より

〈内容〉序章／ぼく自身のためのマニフェストⅠ／転形する革命思想 Ⅱ／社会主義における自由の復権 Ⅲ
／古典的革命観からの解放 Ⅳ／組織論の革命 V／
国家—権力による最高形態

★四六判函入三五頁

価八〇〇円

大沢正道

川島書店

〒160 東京都新宿区柏木1-6-1
振替東京34102 Tel. 371-5935

「自己権力」論を

めぐる断想

— ゴルツとシュティルナーの評価について —

立原信弘

「戦後民主主義の虚妄」が語られはじめてからすでに久しい。この「虚妄」を衝きつつ展開されに大衆的反権力闘争の大波が去っていった今日、わたしたちは抬頭しつつある代議制民主主義の物神化傾向にあらがい、「虚妄」を衝く実践の自生に強固な論理を付与しなければならぬだろう。わたしたちあの大波に加担したのにとつて、「虚妄に賭ける」ことの危険は、ますます自明なのだから。

「戦後民主主義の虚妄」を衝く論理とは、別言すれば、「共同性の幻想形態」（マルクス）としての法秩序に拠りつつその特殊利害を貫徹し、この国の現実を「平和と民主主義」に背反する帝国主義的支配確立の方向へ確実に押し進めている支配階級の動向に、直接的に「異議申し立て」をなしうる「力」の論理である。それは、法秩序への依拠を前提し結局のところ、権力あるものの意志に事態の方向を委ねる「弱者の論理」の否定のうえに成り立つといえよう。

あの大衆的反権力闘争のなかで「自己権力」という言葉が語られ、「アナキズムの復権」が論壇のひとつのテーマとなった。それは議会制民主主義——多数決民主主義への信仰に身を委ねた合法主義的運動の無力が呼びよせたひとつの情況だ。そこには「混乱の中の指標」を求めるひとつの試みが認められる。

かつてわたしは「自己権力」という、言葉について、次のように述べたことがあ

る。

「それは、現代の日本において、『戦後民主主義』あるいは『安保体制』、『国家独占資本主義』等々と呼ばれる既成の社会秩序とその小模型たるさまざまな場の諸秩序にたいする心情の反逆が生みおとした言葉である。それは、社会秩序に包摂されつくした『反体制』運動、『反体制』組織にたいする不信と否認が生みおとした言葉である。さらにそれは、実体的にも意識的にも秩序内的存在と化した自己への恥辱と憤怒が突出させた言葉である。そこには否定はあっても、いまだ明確な肯定はない。心情はあっても論理はない。正確に言えば、論理はつくられつつある。〔自己権力〕とアナキズム、〔マルクス主義〕五号）

そして二年後の今日、わたしはふたたび「論理はつくられつつある」とあえていわなければならぬ。「この社会では徹底的に闘えば負けるに決まっている」という意味の言葉を吐いたのは、たしか吉本隆明であつたが、この言葉の真実をあらためて想起させたともいえる闘争の退潮期にあつて、わたしたちは来たるべき巨大な「実践」による検証を可能ならしめるためにも、「戦後民主主義の虚妄」を衝く論理Ⅱ「自己権力」の論理を、個人の「主体性」論の領域から組織Ⅱ運動論の領域にまでわたって再構成すべきなのである。そのために、アナキズムとマルクス主義の争点を、一切のイデオラを排して分析・再評価する必要をわたしは感じている。

一

アナキズムとマルクス主義にまつわる問題関心にかかわつて、いまわたしの興味をひきつけている二人の思想家がいる。ひとりには『レ・タン・モデルヌ』の編集委員で「新資本主義」下の労働者階級における「攻撃的戦略」の論理を展開しているアンドレ・ゴルツであり、他のひとりにはドイツにおけるマルクスの同時代人で「アナキズムの父」(ブレハーノフ)「実存主義者」(ハーバート・リード)「ニヒリスト」(西谷啓治)等々と評価されているマックス・シュティルナーである。

ゴルツの主張は端的にいえば「労働者権力」獲得のための闘争を革命にとつて第一義的課題として考へるといふことである。この主張の根拠は、第一に「新資本主義」Ⅱ国家独占資本主義のもとにおける代議制民主主義の「危機」、すなわち「支配的経済集団に結びついてゐる寡頭制の手中への決定権の事実上の集中」、中央集権的、官僚制的、国家的管理の強化といったかれの現状認識にあり、第二に「階級

形成」についてのかれのひとつの「哲学」にあるといえよう。第二の点について、ゴルツは「最大限綱領主義的諸傾向」の誤謬を「革命的意志が闘争以前に存在し、闘争の原動力を闘争に提供しなければならぬ」とする断定に求め、さらに次のように述べている。

「事実においては、大衆の社会主義的意志はけっして無から生じないし、政治宣伝あるいは科学的証明によって形成されるものでもないからである。社会主義的意志は、勤労者の経験と欲望に答える妥当な目標をめざす闘争のなかで、この闘争によって建設される。」（『困難な革命』）

この観点からゴルツは闘争の起点をまず生産点に認める。なぜなら、第一に生産点こそ労働者が資本の専制支配を最も直接的に経験する場であり、第二に生産点における不合理な分業こそ、社会における「分子化された人間」の支配を可能にする主要な根拠であり、第二に生産点においてこそ労働者は現実的な集団的勢力たりうるからである。そして、このような意味で闘争の起点たる生産点における「労働者権力」獲得のための闘争のなかで、労働者大衆の政治的自覚は社会主義的意志の形成がはじめて可能になり、階級闘争における政治的次元の地平が開かれるとゴルツは強調している。「闘争の水準を下から引上げることはできるが、闘争を上から引下げることはできない。」

ゴルツの論理は、たしかに『何をなすべきか』に象徴されるレーニン主義の運動組織論に比すれば、「大衆の自然成長性への拝跪」論として凝固させることもできるし、サンジカリズムとの非難もまぬがれがたい。「中間的改良」の積極的位置づけという論旨からすれば、構造改革論への旧来の批判——改良主義批判がそのまま呼びおこされるかもしれない。しかし、それらはいずれも志の低いイチヤモンにすぎないとわたしは思う。なぜなら、その論理は、国家独占資本主義における階級支配の現実と、その下における労働者階級の状態に対するシビアーな観想に裏打ちされたものであって（このような観想こそレーニンの思想の一基底であった）、その内在批判はこのような観想を共有しつつ築かれるべきものだからである。

ゴルツは以上のような批判・非難を想定しつつ次のように述べている。

「社会主義的戦略において漸進的、段階的でありうるもの、またそうあらねばならぬものは、最後の危機と最後の力試しの瀬戸ぎわにいたる過程を連動させる準備局面である。そして、この『社会主義への平和な道』と不適切に呼ばれている道は、

『段階主義』のア・プリオリな選択からも、暴力革命あるいは武装蜂起のア・プリオリな拒否からも生じてこない。」(前掲書)

さらにわたしたちはかれが、レーニン主義型の前衛党と質を異にする政党の役割を強調することによって、サンジカリズムに批判を加えていることをも読みとることが出来る。

ところで、現在までにわたしが読みえた範囲でゴルツの論理のもつ問題点を指摘するとすれば、第一に「労働者権力」の主体が労働組合に求められていることであり、第二にはその「労働者権力」論があまりに戦略論の次元に限定されて発想されていることである。第一の問題点は第二の問題点の結果としての意味をもっているようにも思えるが、別言すれば、個人の思惟方法に構造としての「自己権力」を止揚した運動に組織としての「労働者権力」という発想に立たぬかぎり、「労働者権力」論は、スターリン主義をのり超えた新たな革命の主体を大衆的な規模で形成する力をもちえぬのではないかとわたしは考える。労働力商品所有者たる労働者の存在のあり方そのものを問いえぬ組織形態としての労働組合を「労働者権力」の主体とするゴルツの論理は、右の発想の欠如に、由来しているように思われる。しかし、「労働者権力」の主体を「労働者評議会」として構想するさいにも、右の発想が根幹とならぬかぎり、論理の前進は期待しえない。

以上のようなゴルツへのわたしの関心のあり方は、そのままシュテイルナーへの関心を内在させているのである。シュテイルナーの「エゴイスト」を「市民社会」における私の商品所有者(労働者諸個人を含めて)の自生的意識を対自化した思惟方法に構造として把え、私的利益優先の自生的意識においては対自化しえぬ「幻想的共同態」あるいは「概念」への物神崇拜——自生的意識へのその接ぎ木を否定しつつ形づくられる「主体性」に思想の原理に「自己権力」へそれを媒介してゆくといったところに、わたしのおおよそその問題関心があるといつてよい。

マルクス主義においては、シュテイルナーはすでに『ドイツ・イデオロギー』におけるあの長大な章「聖マックス」をもつて否定されつくされてきた感があった。たしかにあの執拗なまでに皮肉・揶揄の充満した章において、シュテイルナーは「意識に規定された存在」という幻想に観念論的見かたの典型とされ、「社会的諸関係から切り離された意識の変革」という「道徳的要請」を発する「ドイツ・イデオロギー」として扱われ、その階級的立場を「ドイツ小市民」と規定されて葬り去

られたので。わたしもまたこれまで「聖マックス」の煩瑣な論理をたどることなくシュテイルナーをしりぞけてきたのである。

わたしのシュテイルナーへの関心は、主に広松渉の初期マルクス・エンゲルス論に依っている。広松は、一八四四年一月一九日付のマルクスあてのエンゲルスの手紙を根拠として、シュテイルナー評価におけるエンゲルスとマルクスIIモーゼス・ヘスの相違を指摘し、エンゲルスがシュテイルナーの「エゴイスト」をフォイエルバッハの「人間」を超えるもの、すなわち唯物論の出発点たる「経験的な、身体を具えた個人」として積極的に評価したことを立言しているが、とすれば「聖マックス」が主としてマルクスによって書かれたことは明白であろう。もしエンゲルスが「聖マックス」を書いたとすれば、そのシュテイルナー批判の構えはどのようなものであったか。その答えの概要は、あの未定稿「フォイエルバッハ」のなかにかうかがうことができるが、いまそれを分析する紙数がない。先に述べたわたしの問題関心が、その分析の結果であることをここに記して、詳しくは別稿にゆずりたい。

自由連合 社会革命 運動・情報紙『奔流』

自立した八個Vの連合を。諸グループ間の相互媒介を。行為を。
体験の共有を。アナキーな創造を。

たたかいのほとばしるながれをつくりだせ!!

全国各地からの通信を熱望します。

(少なくとも) 月1回刊 定価10号分300円(切手にて)

連絡先 表社気付 CSL 『奔流』編集部

反ファシズム闘争とW・ライヒ

江川 允通

四月の都知事選挙のことなど、もう人はみな忘れてしまったところだが、もし万一はたのが勝ちでもしていたら、ナチの国会登場のときのようなもので、警察ファシズムへの突破口が開かれてしまったのかもしれない。危機はひとまず越えられた。だが第四帝国（第4帝国）が、こんどは日本に、つくられる脅威はまだ去っていない。

全体革命と同義のものとして（広義の）社会革命を目指すわれわれにとって、ファシズムは単に政治だけに限られた問題ではない。それは、社会、文化、各個人の間としての生き方——これらすべてにかかわる事柄である。そのようなものとしてファシズムとの闘争を考えるとき、ファシズムの心理の究明は、当然われわれの理論的課題として取り上げられてよいであろう。

ファシズムの心理的研究

ファシズムの心理的研究としてはフロムのものが有名だし¹、最近クラカウアーの「カリガリからヒットラーへ」も訳が出た²。これら労作がなされたのと同じころアドーノやサンフォードらの「強権主義的人格」の純心理学的研究も出されている³。また昨今ライヒ・ブームに乗って「ファシズムの大衆心理」も訳が出た⁴。

これらがファシズムを心理的に「強権主義」としてとらえていることは、強権なき社会を求めるアナキストの反ファシズム闘争において、未来のファシズムがどんな形をとって現われてきてもその正体を見破るために、さらに潜勢的（心理的）ファシズムに対してそれが政治的実体としての形を整える前に粉碎する闘いを遂行するために、役立つであろう。すなわち、これらの研究は、ファシズム勃興の原因を、それを許した国民の側の強権（強制力）への屈従性（服従性）に見出しており、（アドーノらのものは別として）もっぱらドイツ国民を対象としているが、こうした追従者重視

的、心理的な見方によるのでなければ、ムッソリーニのファシズムや、特に軟体動物のように不定形、無構造な日本におけるかつてのファシズムをも、そして未来においてどんな形をとって現われてくるかわからない第四ライヒをも、ヒットラーのナチスと本質的に同類のものと思ふのは困難であらう。

けれどもライヒ以外によるファシズム追従者の心理の究明は、単にそのような心理の現象的な特性記述を行なったのにすぎないものである。クラカウアーは第三帝国以前でさえドイツ国民が強権主義的屈従性をもっていたことを、アドーノらはアメリカ国民のなかにも強権主義的屈従性をもつものがあることを、そしてそれら強権主義的屈従性の内容がどんなものであり、どのような徴候を現わすかを、実証的に示した。だが、強権主義的屈従性の社会的機能やその形成機制、特にそれらについての理論構成、などは研究の範囲外であったといえよう。

またフロムは、 \wedge 社会的性格の社会的形成 \vee — \wedge 社会的性格の社会的機能 \vee という図式のなかで、一つの思想の受入れ、それによる満足、などについて理論的な扱いをしているが、一次資料によるという意味での実証的研究ではない。特に、 \wedge 社会と社会的性格との作用—反作用 \vee を結ぶ社会的性格そのものについては、この概念を立てたことが彼の主要な学問的貢献であるにもかかわらず、それが一般的にどのような性質を呈するものが記述されているだけで、内的構造を備えたものとして扱われていないし、エネルギーないしは本能といったものをその内に見るといふ意味での力動観をとるものでもない。

このような見方では、①強権主義的なもの一般についての説明はなされても、特殊にファシズムそのものを、それ以外の強権主義的なものとの差違において、明らかにすることはできない。また②社会と社会的性格との相互作用の循環を断ち切るためには、社会の側を変革するほかにないことになるが、社会の表面的な性質の変化だけでは、それによって一方的に社会的性格が変えられるどころか、その前に逆に社会的性格のなかの変化への抵抗によって（それは構造的な見方によってのみ見出しうる）社会変革の過程そのものをもとにもどってしまう（大沢氏のいう「国家への回帰」⁵⁾）ことがある。それをソヴェエト連邦の反動化の分析という実証の支えをもつ理論により、解明したのがライヒである⁶⁾。

ライヒ理論におけるファシズム

ライヒによれば、精神分析学的性格学の課題は「イデオロギーの社会構成員による再生産の研究」とされているが、彼はまた「社会秩序は、すべての社会構成員の精神構造を形成することによって、社会秩序を大衆個々人の内に再生産する……（そして）この再生産過程は本能装置を利用し変化させることによって成就される」と述べ、力動的、構造的な見方をとっている。そして彼の理論は、後期のものは別だが、臨床例という堅確な一次資料の実証的基礎に支えられている。

このようなライヒの性格分析の対象としてのパーソナリティーは、三層構造をもつものとされている。これについては、大沢氏による「オルガスムの機能」からの引用があり⁸、また小此木氏による解説もあるが⁹、ここでは「ファシズムの大衆心理」におけるライヒ自身による簡潔な要約を紹介しよう¹⁰。ただし訳書には承服しがたい翻訳があるので、以下訳文は筆者によるものである。

第一層は、「社会的協同を司る表層」で、そこでは「平均的な人間は、抑制され、礼儀正しく、他人を哀れみ、良心的である」。第二層は、第一、第三層の「間に介在し」「残忍な、サディズム的な、淫乱な、他人のものを奪っても自分のものにしたがるような強欲な、そしてねたみ深い、等々の諸衝動から成っている……倒錯した反社会的な層」である。これらの諸衝動は、ライヒの言葉（すなわち、性—経済の術語）でいう「二次衝動のすべてであって」、二次衝動というのは、それらが「人間の生物としてもつ一次衝動に対する抑圧の結果として二次的に生じたもの」だからであり、それらは、そのようなものとして「人格構造のうちの反社会的要素」をなしている。第三層は、ライヒが「生物学的な核とよぶもの」であって、「この最深層において、人間は、社会的条件が都合のよいものなら、誠実で、勤勉で、協調的な生物であり、愛することができる」とともに、理に合っているなら憎みを抱くこともできる」¹¹。小此木氏によって「この最深層は、自然の生命の摂理にかなった豊かなエロスに満ちている」¹²と説かれているが、そのような核を人格構造の根底に置くライヒの性格心理学は、真に力動的な見地に立つものだといえる。

そしてこのような三層構造における「第二層をファシズムは代表する。ファシズムと対比させると、自由主義は性格表層を、真の革命は最深層を、それぞれ代表す

るものである。すなわち「ファシズムは、平均的な人間の性格が呈するあらゆる非合理的反応の総体である」と、まず、いえる。さらにそれは、「機械文明と、機械論的—神秘主義的人生観をもつ、強権主義社会における人間の基本的な情緒的態度である」といえよう。このようなものとしてのファシズムは、なおまた「反逆的な情緒（真実を知ることに対する恐怖が革命的情緒を幻想に変える場合に発生するもの）」と反動的な社会的理念との混合物である」ともいえるもので、単なる軍国主義や単純な反動的政治運動とは区別される、と説かれている¹³。

こうして、一見ファシズムと似ているものとファシズムとの違いが明らかにされ、真の革命とファシズムのもつ「みかけの革命的情緒」との混同が正される¹⁴。それとともにこのような性格分析的ファシズム論は、他方では、通常ファシズムとは見なされていないような他の多くの現象とファシズムとの本質的同類性を見出し、その上でのファシズムとの差違を明らかにするというように、これらの現象をファシズムとの関連において説明するであろう。それを可能にさせているのは、ライヒの性格論が三層説の構造的なものだからであり、さらにそれだけでなく、最深层において生命力ともいべきもの（生命そのものであるエロス）¹⁵が湧き起り、それが表層へと流れ出てゆく過程を追究する、という力動観がとられているためである。

すなわちライヒ理論によれば、「生物学的核から発する自然な、社会的な、もしくはリビドー的な衝動は、すべてそれらが行動として発動される途中で、倒錯した二次衝動の層を通過しなければならず、その層で歪曲されてしまう。この歪曲は、自然な衝動がもつていた社会的な性格を倒錯した衝動に変えてしまうもので、それによって真正な生のどんな現われも制止されてしまう」。このように、第二層の介在のため「表層が最深层の自然な核と直接接触をもって」いないことは「人間という生物にとって社会的悲劇」の原因である¹⁶。

けれども、構造的、力動的パーソナリティー・モデルだけでは、現実の問題を解くのに十分ではない。一つ補足すると、表層の内容として利己的な道具的理性¹⁷の固まりのガリガリ亡者たちのつくる徒党的社交性があり、第二層には家長制的家族への執着とか、郷土愛とか、民族や祖国といった幻想の大我への帰一を求める、偏狭で排他的な一体感としての偽りの社会性がある。そして最深层にあるのは、世界じゅうの全人類（われわれは特権階級を除外するであろう）との交流を求める普

的人類愛としての眞の社会性である、ということである。「民族を越えた人間の交流による自然で生物学的な労働民主制の発見は、ファシズムに対する解答」だとライヒはいつているが¹⁸、それは性格の最深層でえられるだろう。

ファシズムとは関係ないと思われる

いるものとファシズムとの関係

最近封切られた「罪と罰」は、小説の映画化として優れたものであるだけに、フロイトによるドストエフスキー批判もよく理解できる¹⁹。なぜドストエフスキーの、そしてセリヌの、深さが、こうも人々に強い感動を与えずにはおかないのであろうか？ まず、彼らの作品のなかでは、「偽りの、見せかけだけ社会的な」²⁰表層の、主人公による棄脱がある。それは、このひからびた人格のからがあたかも第三層の根源的エロスの噴出で吹きとばされたように描かれ、読者・観客も、主人公との同一視からそう感じる。それが感動描くあたわぬ深さの感じとなる。

だが現実には表面に現われたのは、第二層でしかない。その反社会的二次衝動に押し流されて主人公は罪を犯し、悔い改めて罰を受け、ツァーや教会など既成権威に回帰・没入する。このことをフロイトは言葉激しく批判するが、なぜそれが深い感動を誘うのかを十分に説明していない。ライヒ理論によれば、これら既成権威こそ、一次衝動を二次衝動に変えた抑圧の執行者だということになる。そこで読者・観客の側から見ると、まず①固結した表層がひび割れ、②反社会的衝動が割れ目から噴出するのに出会う、最後に③抑圧者（への一次衝動の屈服）に行き当たってENDとなる。②からは一次衝動が迸り出たかのごとき幻想がえられ、③からは大我への帰一感がえられる。だが現実にはそれは人類全体との一体化の実現ではなくて、祖国や民族との一体感にすぎない。②も同様に、現実には二次衝動が溢れ出たのでしかない。それなのになぜそれが一次衝動の湧出と錯覚されるのか？

表層の下で鬱積していた二次衝動が表層の割れ目から流出すると、第二層においてはいわば鬱積の圧力が低下するといったことが起こるのであろう。すると最深層から根源的エロスが第二層に流れこむであろう。もちろんそれがそのまま表層に達することはなく、第二層で抑圧・変質されてしまうのだが、ともかく第三層は揺り動かされ、一次衝動は沸き立ち、流れ出る。これが二次衝動の表面への湧出を一次衝

動の噴出と錯覚させるのではないだろうか？ ファシズムでさえ、大衆心理を捕ええたのは、単に二次衝動だけを代表したことによるのにとどまらないであろう。「ファシズムの神秘主義は(集团的)オーガズム願望である」といったとき、ライヒは第三層におけるこうした一次衝動の沸き立ちを指したと解してよいであろう。21

だが、いかなる二次衝動の流出もこのような、錯覚的效果をもちうるのでなく、最深層に接する深い部分からの二次衝動の流出だけが、一次衝動を第二層に吸いこむ結果になるのだろうか。だから、吸いこまれたばかりの生の一次衝動が、すぐその次に出くわす抑圧者——第三層から第二層への入口附近にいる——の描写は、臉の根源的エロスへのストレスの接近を意味するということになり、それがこうした錯覚を強化し、深さ感を与えるのではないだろうか？

だが文芸は、ドストエフスキーのものといえども、第三層に立ち入ることはできないだろうか？ 罪と罰におけるソニヤは、特に最後の流刑地の場面において、最深層の象徴である。彼女はライヒの考える原始的母権制共同体の具現であり、だからこそ第一、二層を代表する体制内では、家父長制的家族の対極として街娼の姿をとっている。第二層よりさらに深く掘り下げ、ここまで透徹して生そのものを見極め、生きる欲びを描きえたドストエフスキーは偉大である。それを見落すという日常生活の精神病理こそは(カラマゾフに焦点を合わせたにせよ)体制側へ日和ったフロイトの限界を示す。このことはライヒの性格構造論に導かれれば見誤ることはないし、ここにそのフロイトのそれへの優越性がある。筆者も危く、フロイトのように、このことを見落すところだったのは、ソ連映画「罪と罰」も流刑地の場面が欠け、フロイト同様ソニヤの真の姿を見落しているからである。これもライヒが指摘するソ連の反動性の現われなのか？ だがソニアによって一次衝動が代表されても、そこにあるべき革命命は描かれていない。ソニアもラスコリニコフに国家権力への屈服を勧めるといふ形の歪曲を受けている。この段の最初の疑問は、依然解かれない。

ところが、罪と罰は単なる犯罪小説と違い、素朴な堕落願望—代償的満足説では説明がつかない理由であらう。同様に単なる犯罪ものと違って素朴な精神分析では片づけられず、ライヒ理論をもってこなすには、大衆の間にそれがえている広く深い愛好を理解しえないものとして、西部劇、股旅物、高倉健……がある。これらが飽かれもせず人々をひきつけているのは、(歪められた)人間らしさ、すなわち

最深層をゆさぶる二次衝動の噴出があるからである。だがドストエフスキーの文学などと比べると、これら大衆娯楽では、第一層の破壊はより粗暴であり、抑圧者と出会うところまで掘り下げる深みもない。従って一次衝動の第二層への吸いこみはずっと少なく、インテリには一次衝動流露の錯覚をもちにくい。

さらに、第二層に醗酵したエネルギーの爆発的噴出が一次衝動の疑似的湧出の幻想を伴うものには、維新的(革新的ともいわれるが革命的では決してない)右翼がある。北一輝、権藤成郷、等々は、表層に座を占める体制の破壊・再構成を目指す点で、体制の走狗たらんとする赤尾敏のたくいや、単に保守的な国粹主義と異なる。それは民族・国家・社稷の団結の純化、強化を志向するがゆえに、表層の個人主義的自由主義と対照的であり、この点では同じ側に立つ「国際的全体との同一視」²²と混同されやすい。だが国家民族主義的であることは、革新的な装いにもかかわらず伝統を尊重することとなり、それはまた先祖との一体感を強めることになる。こうしてライヒの性格分析によって本性を見究めないと、これこそは根源的エロスの発動だという幻想を抱きやすい。だが、これらの右翼が尊重する伝統は、文化人類学でいう大伝統であって、権力によって護持されてきたものである。従って、革新右翼といっても、中間権力機構を破壊・排除しようとするだけで、最高権威(首たる抑圧者兼大伝統の首たる護持者)は温存しようとする。なお大伝統とのつながり点で、北らの思想を土着思想とはよびたくない。

なお次に、最近とみにポピュラーとなった「土着」的なもの……横尾忠則、唐十郎……がある。土着というものの「の中に在るものは意外に複雑であ」²³り、一概には論じられない。だが土着文明が文化人類学者のいう小伝統を意味するなら、それは確かに自然のままに最も近い生から自然発生的にじみ出た創造的活動の結晶である。そしてその担い手は、共同体である。しかも正統の確立した大伝統と違い、変形をつくつても文句が出ない可塑的素材であって、これを扱う現代の人間に対し、一次衝動の発現に最も近い創造性の發揮による満足を与える。

またこれは、大伝統のように表層に取りこまれ、体系化されたり、権威づけられたり、権力から保護されたりするどころか、アカデミズムからさげすまれ、工業化により破壊され(最近マスコミによる取りこみはあるが)、特に日本では西欧化により押しつけられ、権力によって弾圧され(生殖器崇拜のように)さえもしている。これらに対する反作用として、土着的なものは反権力の原点でありえ、工業文

明によつて無機化された表層をブツとばそうとする生の主張となりうる。なお先祖を含めての民族の一体感をうる媒体となることは大伝統と同じである。今回は論じる紙面がないが、ヒッピーも同様な反表層の二次衝動の主張である。

アナキズムがファシズムと異なるところ

ここまでくればアナキズムまであと一歩である。こうして、ライヒ理論に導かれて、ファシズムからアナキズムまで変異の跡をたどってみると、セリヌ、ドストエフスキー、高倉健、北一輝、横尾忠則、ヒッピー（に代表されるもの）で、この間は隙間もなく塞がってしまった。そこで、アナキストと称する人たちの間に、北一輝や土着的なものへの関心を示す人がいるのも、またそれらを経てアナキズムに入ってくる人がいるのも不思議ではなくなる。ここに国家への回帰の通路もあり、セリヌのファシズムへの傾斜も理解できる。だがアナキズムは、これらと似ていても異なるものであり、ライヒ理論の価値はその相違を明らかにしうることにある。

まず、アナキズムだけが、真に革命的なものである。「人類社会のさまざまな政治的、またイデオロギイ的集団は、性格構造の諸層と対応している」というライヒの言に従えば²⁴、アナキストは性格の最深層と対応し、歪められない一次衝動を代表するものでなければならぬ。その発現を二次的衝動の暴発ととり違えることは、真のアナキストにはありえない。またアナキズムは、普遍的なフラテルニテの精神による全人類的な真の社会性を主張する。革新右翼も、土着文明も、それが民族主義への固着を断ち切り、国家の枠を破れない限り、アナキズムとは関係ないのである。

だが北一輝や土着的なものへの関心は、アナキズムへの導入になりうる。「客観的理性」に従う完全アナキストを求めるのは、むしろ青い鳥を追うに等しい。生命そのものであるエロスは、現在の世界においては、そのままの形で現われることができないのを、忘れてはならない。民衆の間に逆巻く「ロマン的叛逆」の情念、狂気、をとらえ、ファシズムのようにそれを利用するのではなく、そのエネルギーを「理性的叛逆」に転換する作業こそ、アナキズム運動の主体であらう²⁵。この作業は、ライヒ理論の適用によつて——アナキズムがライヒ理論を、とり入れるならば——可能なのである。それを怠ればロマン的叛逆はファシズムに吸収されるであら

う。これによって、北一輝からの、土着文明からの、ヒッピーからの、アナキズムへの道は一方通行となる。なお、フォーク・ソング、フォーク・アーツなど土着的なものへの愛好は今や世界的であり、大、小の伝統を身につけることを国際的社交性の前提となっているが、ライヒ理論は、それらから「インターナショナルなもの否定傾向」を除去し、「土着という言葉のなかに（感じられる）危惧」²⁶ に対しての安全保証装置となりえよう。

おわりに——アナキズムにとってのライヒ

以上は、アナキズムとファシズムの間にあるものの両極との異・同の弁に、ライヒの対ファシズム闘争のための理論体系からの一断片を応用する試みであるが、これによっても敵を味方と、味方を敵方と、間違えるのを避ける役に立つだろう。

われわれにとってのライヒの意義は、対ファシズム闘争にとどまるものではない。さらに進んで、現代アナキズムを構成する基本的諸理念に留意しつつ理論的視点からライヒ理論を展開すると、それら諸理念のほとんどすべてに対して、実証的基礎の上に有効性を保証された、よい意味での科学的な、豊かな内容の理論がある。

自己生命力²⁷、自然のままの人間、その共同社会、そこでの男性・女性間の、親と子の間の、平等な基本的社会関係、そこでの自発的で喜びに満ちた労働、それと遊びの関係、圧政と搾取とともに抑圧のない社会、革命運動と禁欲主義……

これまでのアナキストたちが、直観的に、思弁的に、もしくはごく巨視的に、立てきたこれらの理念は、国家の死滅だけでなく未来社会の根底からの再建設を目標とするわれわれにとって、ライヒ理論によって、空想から科学ではないにしても、倫理から科学へ、ないしは哲学的観念から実効ある方法へ、の飛躍をとげなければならぬものである。「(アナキストの) 人間性に対する……家族……国家の権力・権威からの完全な自由に対する基本的な信頼……(を) 支えるために提唱された(ライヒの) 科学的学説こそ、アナキストの理論的知識を増進するためそれに付加することが必要欠くべからざるものであろう」²⁸ というベルネリのライヒ論の結語は、そのまま小論の結語となる。これによって新しいアナキズムは人類にとってなくてはならないものになるだろう。そして他方では、ライヒの理論は実践に移さ

れ、豊かな絵りをもたらすであらう。ライヒ理論のアナキズムへの取り入れが、都知事選挙という偶然事をきっかけとして、一步でも進めば幸いである。

参 考 文 献

- 1 日高六郎、自由からの逃走、創元社、一九五一、Fromm, E., *Escape from Freedom*, N. Y., Rinehart, 1941
- 2 丸尾定、カリガリからヒットラーへ、みすず書房、一九七〇、Kracauer S., *From Caligari to Hitler*, N. J., Princeton University Press, 1947
- 3 Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., Sanford, R. N., *The Authoritarian Personality*, N. Y., Harper, 1950
- 4 平田武靖、フンシズムの大衆心理、せりか書房、一九七〇、Reich, W., *the Mass Psychology of Fascism*, (Wolfe, T. P., tr.) N. Y., Orgone Institute Press, 1964. 最近 Carfagno, V., *tr.* N. Y., Farrar, Straus & Giroux, 1970 に出ている。
- 5 大沢正道、反国家の理性、展望、一九七〇、一月
- 6 Reich, W., *op cit.*, Chap. 9. 及び、小野泰博・他、セクシュアル・レボリューション、現代思潮社、また、中尾ハジメ、性と文化の革命、勁草書房、一九六九、Reich, W., *The Sexual Revolution*, N. Y., Orgone Institute Press, 1945
Part II
- 7 小此木啓吾、性格分析、岩崎学術出版社一九六六、三七〇—三七二頁、Reich, W., *Character Analysis*, N. Y., Orgone Institute Press, 1949
- 8 大沢正道、前掲論文
- 9 小此木啓吾、エロスの人間論、講談社、一九七〇、一九九—二〇〇頁
- 10 Reich, W., (1946) *op cit.*, Preface to the third edition (以下同く)
- 11 *Ibid.* (本段の引用全部)
- 12 小此木啓吾、前掲書二〇〇頁
- 13 Reich, W., (1964) *op cit.* (本段の引用全部)
- 14 *Ibid.*
- 15 小此木啓吾、前掲書、二〇〇頁
- 16 Reich, W., (1946) *op cit.* (本段の引用全部)

- 17 大沢正道、前掲論文
- 18 Reich, W., (1946) *op cit.*
- 19 高橋義孝、ドストエフスキーと父親殺し、人文書院、(フロイト著作集、Ⅲ)
他に日本教文社、フロイト選集、Freud, S., Dostojewski und Vaterötung, 1928
- 20 Reich, W., (1946) *op cit.*
- 21 *Ibid.*
- 22 *Ibid.* Chap. 2~5
- 23 秋山清、土着ということ、乱、一九七二、一月
- 24 Reich, W., (1946) *op cit.*
- 25 大沢正道、前掲論文(本段の引用全部)
- 26 秋山清、前掲論文
- 27 大沢正道、反国家と自由の思想、二三〇—二三三五頁
- 28 江川允通、ヴィルヘルム・ライヒ論、黒の手帳、第九号、Berneri, M. L.,
Sexuality and Freedom, Now, 1945

ニヒル

秋山清

ニヒルという言葉もいつか底が浅くなってしまったようだ。ニヒルの底ではなく、ニヒルを流行語たらしめているものの底の浅さ、といった思いである。

ニヒル―虚無、空、無価値なもの。

小さな手許の辞書にはこう書いてある。それにつづいてニヒリズムがある。ニヒリズム―(哲学用語)①一切の信仰・道徳を否定する主義、②一切の实在を否定する懷疑説。

ニヒリスト―虚無主義者

辞書のこの言葉の解説を見ていて、実に容意ならぬ言葉であるとおもった。私も亦近ごろニヒルとかニヒリズムとか気軽につかっている。つかいすぎるほどである。三、四年前には『ニヒルとテロル』という安っぽい本を出したこともある。あれは一体なにごとであろう。

私は、ニヒルという言葉の意味がじつはよくわからない。ひどく退屈的な思ひになったとき、ニヒルな思ひだとそれを自覚することがあったが、そのときの思ひは「实在を否定する懷疑説」に近いようにおもわれる。このような傾向、内的に自己をまで含めて懷疑したくなるというのは、自己の不甲斐なさの合理化にどこかでつながろうとする心理のうらがえし、というように自覚した覚えがある「实在をうたがう」というのは、实在をうたがわぬことの裏がえしみたいなもので、安穩に生きていた時の、自己への甘ったれでもある。あるいは自我認識の倦怠である。現状への敗北を自覚の線から退けようとするものに通ずる、というのが私自身における自覚である。だからそれに、ニヒル、という言葉の内包する部分ではあっても、その私における意義は意外に低くなければならない。

ニヒルには、この「实在を懷疑する」ことの他に「一切の信仰を道徳を否定す

る」というもう一つの性格があり、現実にはその方が強烈である。信仰と道徳を否定するということには二つの積極性がある。信仰も道徳もその社会の支配的な権威と権力につながって、生活習慣の場から民衆を（吾々を）コントロールするものがある。それは権力の支配を合理化するものでしかない。それを否定しようとする積極性が一つある。もう一つは宗教における神、道徳における現実的な安穩、この平板な現状維持の否定ということ、つまり現体制への反抗がそこに胚胎することである。

自分が棲息している社会の現状と対立し、批判し、反抗にまで至ることの背後には、信仰と道徳を否定するところからはじまる孤立がある。それが異端といわば云うべきものであろう。しかし異端には内部反対派の意味がつよい。異質による対立、相手の否定、それが「信仰と道徳の否定」の本旨でなければならぬ。われわれにとって有効性の強烈なものは、「实在を懷疑する哲学」よりも「現実を否定する主義」でなければならぬ。ニヒルという言葉は、かくしてまず、われわれの前に異彩を放たねばならないのである。

私が言葉として「ニヒルの底が浅くなった」と思ったのは、ニヒルからこの現実否定の強烈さが退色しつつあると感じたことである。世間一般のことではない。われわれの気組みにおいてもそうである。流行語になったとき、その言葉はすでに遁走をはじめつつあると見ていい。人口に膾炙されるとき、共通の広場の思想にまでその言葉の特殊な意味の激烈さは薄められるものである。いまやニヒルは、その広場の共通語化し、日常の会話用語となつて、社会的あるいは哲学的に屹立した歴史の意味から遠ざかりつつある。いいかえるとわれわれの言葉であるよりも、反抗的ならざる民衆の日用語となり、進んで現状に安息する者たちの会話に墮さんとしてつあり、さらにそれは常識化してわれわれにまで逆作用して意味を薄弱化せん傾向が顕著である。

ニヒル—ニヒリズム。虚無主義—虚無党。ある時代にはこの言葉はテロリズムを連想させた。強烈な哲学的否定が激烈な現実否定の闘争につながっていたからである。

「あ、ニヒルだわ」と言われてみると、角砂糖ほどの重味もないではないか。せいぜい、今日唯いまのアンニュイがやりきれないというくらいのことになってしまった。われわれの言葉が、われわれの言葉でなくなつてゆくという過程の一例とし

て、今日私は「ニヒル」の拡散を憂愁するのである。

もうニヒルには、一切の信仰、一切の道徳を否定して、権力階級をふるえ上がらせたエネルギーはない。言葉が敵の側のものとなった見事な例証である。

ニヒルについていうならば、一切を否定する言葉の現実的反逆性に期待し得なくなつたとき、ある時期いささか軽んじてきた「実在を否定する懷疑説」の観念性の方にもう一度戻つてみる必要があるのかもしれない。一切の存在の価値を否定する懷疑に立って、支配とその権力を否定するニヒリズムとテロリズムは出発したのであつた。

われわれは否定に馴れすぎ、否定することを忘れていたのかもしれない。何もしないで否定したつもりになり、否定し得たつもりになつていたらしい。現実を見よ。否定しつくさねばならぬ筈のものが、ますます強大化し拡大化しているではないか。国家、政府、経済、戦争、それらは拡充し、人間はその下で、生存も生命もニヒルされることますます甚しいのである。否定されているのは、民衆であるところの君自身、おれ自身ではないか。

ニヒルをほとんど流行語化したものは何であろうか。充滿する不安な民衆生活の中に民衆がなれ果てたということではないだろうか。否定する意欲の欠如であり、否定する対象の拡散がそこにある。十九世紀末の世界のテロリズムは否定の対象を権力と権力の行使者に照準したが故に、明確な活動の方針が定められた。今日日常語化せんとしつつあるニヒル（ニヒリズム）は日常の茶飯事にたいしてのわずかな否定用語となりはててしまった。ここに厳密な意味での、自己否定も敵の否定もない。サロンに言葉が氾濫するとき、ニヒルは何ものをも否定しない。サワギはあ

る。たたかいといふべきものはすでに街頭にはない。
ニヒルはニヒルされたのであるという理解に救われるのは、われわれではないであらう。

労働者評議会の思想

アントン・パンネクック

1

成長の一世紀の間に資本主義は、単に世界全体にひろがったばかりではなく、自らその姿をかえながらその力を著しく増大させてきた。

同様に、労働者階級も力、数、組織を増大し集中化した。資本主義の搾取に抗して生産手段を制圧するために、新たな形態の下でその闘いは休みなく展開されているし、また展開されねばならないのである。

資本主義の発展は、生産の主要な部門で力を巨大なトラストと独占の手に集中させた。このトラストと独占は国家権力と緊密に結びついていて、実のところ国家権力を掌握しているのだ。彼らは報道機関の大部分を統制し世論を操作している。ブルジョア民主主義は、この大資本の政治的支配のこの上なきいちぢくの葉の役割を果しているのである。同時に多くの国では、組織化された国家権力を、計画経済の端初である基幹産業の管理をその手中に集中するために、利用する傾向が次第に明らかになってきている。ヒトラーのドイツでは、国家による計画経済が政治的監督と経済的管理を単一の階級の中で接合した。国家資本主義体制下のロシアでは官僚階級が集団として生産手段に対して権力をふるい、被搾取大衆はその独裁に屈服している。

2

労働者の闘争の目的として描かれた社会主義は、実のところ政府による生産の組織化にすぎない。それは国家社会主義であり、国家の官吏、指導者、学者、工場幹部の権威による生産の監督である。

社会主義経済に於ては、この集団はただちに生産過程の主人公であるように組織された官僚階級を形成する。それは生産全体を自由にし、全体の必要のためと自分たちのための分を残して、どれだけ労働者に割当てるかを決定するのだ。民主主義

体制では、労働者は自らの主人を選ぶことはできるが、彼らが自らの労働の主人公にはなれない。彼らは生産物の一部しか受けとらず、それも他者によって与えられているのだ。彼らは依然として搾取されていて、新指導階級に服従しなければならぬ。民主主義的とみなされる形態はこの体系を伴い、今日もまた明日も少しもその根本的構造を変えはしないのである。

社会主義は、労働者階級が出現したばかりで力がなく自ら工場管理を貫徹できなかった時期に、労働者階級の目的と宣言され、社会改良の中に資本家階級に反対する国家の擁護を探しはじめた。その目標であった大政治党派、労働党と社会民主党は、世界制覇のための戦時にも平和時の国内政治に於ても、資本主義のために労働者階級の人集めをする道具へと変身した。英労働党政府がやったことは労働者の解放ではなく資本主義の近代化であり、けっして社会主義的とはいえない。労働党政府は、甚しい不名誉をなくし遅れをとりもどし利益を維持するために国家管理を導入して、資本の支配を強化し労働者の搾取を続けているのである。

3

労働者階級の目標は搾取からの解放である。この目標は、ブルジョアジーに代る新指導階級によつては達成されていないし、またされるはずもない。それは、労働者自身が生産の主人公になる場合にのみ達成されるのだ。

労働者が生産の主人公であるとは、第一に各工場、各企業で労働の組織が成員によつて作られたものであることを意味する。規則は、指導者やその属吏によつて制定されるのではなく、労働者全体によつて決定される。全員——生産に従事する者の全て——が集会で共通の仕事に関する一切を決定するのである。仕事を実際に行うものが、全員の範囲内で、労働を管理し、責任を持つべきであり、この規則は生産のあらゆる部門に適用することができる。それは、労働者が細分化された企業を計画化された生産の有機の本質に再編成するために、彼らの組織を創ることを意味している。この組織こそ労働者評議会なのだ。

労働者評議会は、種々な工場または大企業の各部門の成員によつて、彼らの意図や見解の代弁者として選ばれ委任されたものからなり、共通の事柄を討議し、決定を下し、委任者にそれについて報告するためのものである。労働者評議会は、いろいろな規則を定めて公布し、共通の一つの立場にたつ様々な意見を統一しながら個

々の単位の間を結合し、巧みに組織された全体を構成する。労働者評議会は、決して単一の永続的指導委員会を形成せず、いつでも解任される。その最初の萌芽はロシア及びドイツ革命の初期に出現した（ソヴェトとアルバイターレーテ）。それは、労働者階級の未来の実現にあたり、次第に大きな役割を果すべきである。

4

今日まで政治的諸党派は二つの機能を果してきた。まず第一に、それらは、彼らの綱領を実行するために、政治権力、国家の支配、政府を掌握すること、権力の行使を渴望している。第二に、それらはこの目的のために労働者大衆をその綱領に同調させねばならない。彼らの教育は労働者大衆を啓発することを主張しながら、そのプロパガンダは労働者を羊の群に変えようとしているのである。

労働者党は、働く者の利益によって統治すること、とりわけ資本主義を廃止するために、政治権力の征服を目標としている。彼らは、労働者階級の前衛であり、労働者階級の未組織大衆を指導でき、階級の名で行動でき階級を代表できる最も先見の明ある労働者階級の党であると断言している。彼らは労働者を搾取から解放できると主張している。しかしながら、被搾取階級は、単に投票や新政府権力への到達によっては解放されえない。政治党派が自由をもたらすことはできないのである。党は、隷属の新たな形成をもたらすだけなのだ。勤労大衆は、彼ら自身の組織的行動によってのみ、すなわち、運命を自分のものにしながら、評議会によって労働と闘争を自ら組織し指導することを目指し、その一切の力を傾け努力することによってのみ、自由を獲得することができるのである。

党に属する第二の機能とは、すなわち、思想と組織をひろめること、教育すること、討議すること、社会思想を定式化すること、そしてプロパガンダによって大衆の精神を啓蒙することである。労働者評議会は、実践的行動の、労働者階級の闘争の機関であり、労働者階級の精神的力を築きあげる任務は党に帰せられる。その仕事は、労働者階級の自己解放に不可欠のものである。

5

資本家階級に対する闘争の最も強力な形態はストライキである。ストライキは、賃金を低下させ、労働の強度と時間を増大させることによって利益を増大させる資

本家の傾向に対して闘うために、今まで以上に必要である。組織的抵抗の道具である組合は、相互扶助と連帯に訴えながら形成されてきた。しかしながらヘビッド・ビジネスの発展は、資本の力を著しく増大させ、特殊な場合以外は、労働者の条件の悪化はさげることができない。組合は、資本家と労働者の仲裁の道具になっている。組合は、雇用者と協定を結び、しばしばいうことをきかない労働者に協定を守らせようとする。組合の指導者は、労働者階級を支配している国家と資本の権力装置の一部分として認められることを熱望している。組合は、独占資本が労働者に条件を押しつけるのに利用する機関になっているのだ。

それ以来、労働者階級の闘いは次第にヤマネコ・ストライキの形態をとってきている。長い間抑圧されていた測り知れぬ反抗精神の自然発生的爆発、労働者が闘いを自らのものとした直接行動は、組合と指導者を放り出した。闘争の組織化は、ストライキ委員会、ストライキ参加者の代表たちによってなされる。この委員会の中の討論は、労働者が行動の結合を実感できるものである。ストライキをますます広範な大衆に拡大することは、資本家から譲歩をもぎ取るために唯一適切な戦術であるが、闘争を限定し可能ならすく終らせる組合の戦術とは正反対のものである。このヤマネコ・ストは、今日、資本に対する労働者の階級闘争の現実的な唯一の形態である。このようにして、彼らの自由は確立され、彼ら自身がその行動を選択し指導し、彼らにとって無縁かつ利害を異にする力の指導をうけないのである。このことは、階級闘争の未来にとって重要なものを示している。ヤマネコ・ストが次第に大きな拡がりをもってきた時、それに敵対する国家の物理的な力と直面することになる。

そのとき、ヤマネコ・ストは革命的性格を帯びる。資本主義は一つの世界的政府に変質している(今日では、全体の破壊によって人類を脅かす競争的な二つの権力からなる)ので、自由を求める労働者の闘争は国家権力に対する一つの闘争となった。このストライキは大ゼネストの性格をもつ。ストライキ委員会は、その時、政治的かつ社会的な一般的機能を、つまり労働者評議会の役割を果すのである。社会の支配のための革命的闘争は、その時、工場管理のための闘争となり、闘争機関である労働者評議会は同時に生産機関となる。

◇

〔付記〕アントン・パンネクック(一八七三年—一九六〇年)の名は『国家と革命』

などのレーニンの著作を通じてしか知られていないが、オランダの天文学者であり、同時にローザルクセンブルクとともに第一次世界大戦前のマルクス主義極左派の主要な理論家の一人だった。その後彼はプロレタリアートに対する一党独裁に反対し、労働者評議会を基礎とした社会を主張する、評議会共産主義運動に参加する。主著としてはレーニンとボルシェヴィキのブルジョアの性格を示した『哲学者レーニン』（ニューヨーク、一九四八年）と、自己の革命戦略を明らかにした『労働者評議会』（メルボルン、一九四七年）がある。

編集後記

レットル貼りが愚劣なのは、それが既成の枠組みに無批判に依拠している故である。アカデミズムのなかでも分類学という奴がもつともくだらない。アナキズムという奴もともすればひとつの枠組みとなる。その枠をも解体するのがアナキーだ。『乱』は、今後も大いに非アナキストに書いてもらおう。

今号より、八十円に値上げする。但し、定期購読料は据え置く。

乱 RAN 5号

1971年5月20日発行（月刊）

| | |
|------|--------------|
| 定価 | 80円（〒25円） |
| 定期購読 | 6号分 500円（〒共） |
| 編集者 | 『乱』編集委員会 |
| 発行者 | 秋山清 |
| 発行所 | 麦社 |

東京都豊島区南池袋1-15-21田中ビル207
tel. (03)987-5765 振替東京 144722

構造

六月号 一六〇円

■特集

革命・戦争・ゲリラ

革命武装勢力の概略と問題点……………上野 勝輝

遊撃戦争の戦略問題……………

…日本共産党(革命左派) 神奈川県委員会

71アメリカ素描―「民主ファシズム」から「革命」へ―

……………野 呂 久

恋々加留多鼠小僧次郎吉……………佐 藤 信

革命的議会主義の陥穽……………蓮台寺 晋

経済構造社

中央区京橋 2-4
Tel (272) 2659

黒の手帖

人間における遊戯と労働(2) 大沢正道

カテキズムへの回帰 内村剛介

文学のアナ・ボル論争(3) 秋山 清

土着の原理 草階俊雄

プルードンと現代(3) 長谷川進

杜鵑の声 宋世何

スペイン革命におけるCNT(4) ペイラツ

黒の手帖総目次(一一一〇号)

一一号 二〇〇円 (〒45)

黒の手帖社

東京都新宿区北山伏33(大沢方)
振替 東京 102465

全体革命への序説

一五〇円
（T35円）

大沢正道

「アナキズムの原理と原則」「プロレタリア独裁と連合主義」の二論文を収録。研究会テキスト等に好適の入門書。

研究会等で十部以上まとめて申込みの場合、割引あり

アナキストの文学

二四〇円
（T45円）

秋山 清

「アナキストの文学とアナキズムの文学」、
「アナキストの文学」、「昭和の詩人群」からなる本書は多年にわたりアナキスト詩人として活躍してきた著者の総括ともいえよう。

私の見た

日本アナキズム運動史

増補版

近藤憲二

六月刊行 予価三〇〇円（T45円）

大杉の片腕として活躍した著者が体験をもつて語る日本アナキズム運動史。基本資料としても高く評価される。再版にあたり、新たに秋山清氏の解説を加えた。

クロンシュタットの反乱

独裁と革命

ベルクマン

残部僅少
二〇〇円
（T35円）

フアブリ

残部僅少
二〇〇円
（T35円）

麦 社

東京都豊島区南池袋1-15-21 田中ビル207
振替口座 東京 144722 tel (03) 987-5765